



善頭エッセイ

はこだて旅便い

「今日もぷらぷら」

145

「思いを受け継いだ百年庭園」



文月 斉 (ふみつき さい)
埼玉県出身。
人と街、自然と文化を題材に、
みちくさばかりの旅を続ける
エッセイスト。
函館、埼玉、大阪を拠点に
旅を満喫中。

前略、変わりはないか？

ゴールデンウィークはどんな過ごし方しているのかな。函館では今年も桜の開花が早く、連休を早めに取って訪れた。前半組みみの旅人は、北国の遅い春を堪能していた様子だったよ。例年より10日も早い開花に立ち会えるなんて、なかなかの強運の持ち主か、決断力の早い性格の人だね。だってほら、正月気分の抜けきらない1月上旬に、気象サーブیس各社が今年最初の開花予想を発表していたでしょ。その後も各社が10回以上改訂版の予想を出していたけど、結局、最初の予想通りのタイミングで開花したからね。あの段階で宿や切符の手配をした人は、満開の桜と花吹雪を堪能できたわけだから、ナイス決断力だよ。まあ、そこしか休みが取れなかったという人も多いのかな。かく言う僕の友人も、そこしか組の一人だったそうだよ。それでも、友人の予定があったからこそ僕は旅に出なかつたし、おかげで今年の早咲きの桜を満喫できたから感謝だね。しかもおまけがあつて、友人が選んだ宿で思わぬ発見をしたんだ。

函館湯の川温泉・湯元啄木亭。ほら、空港から街に向かう途中、温泉街を抜けるでしょ。あの一画にあるホテルなんだけど、玄関からロビーに入ると、全長40mのガラスパネル越しに日本庭園が視野いっぱい広がるんだよ。近代的なホテルの外観のイメージから一転しての庭園だから、かなりのインパクトがあるよ。新緑にはちよつと早かつたけど、若葉が出揃つたらかなり美しい光景だろうなあ。頭の中で青々とした光景を想像しながら庭に近づくと、片隅に案内板が設置されていた。庭の名前は「松岡庭園」。なんでも、もともとは松岡陸三という明治時代後期から昭和の初期に活躍した函館の実業家のお住まいの庭で、今年で誕生百年を迎えるそうなんだ。

そりゃあ、京都などの古い庭に比べればまだまだ新しい庭ということになるんだろうけど、開港から160年そこそこの函館で100年続く日本庭園なんて、見事な紅葉で知られる見晴町の香雪園くらいじゃないのかな。調べてみると、案の定同じ時代に作られた庭だと分かつた。啄木亭のマネージャーさんが、松岡氏の娘さんに話を伺つたところ、京都の庭師が設計したこと。時代的にも香雪園を設計した庭師辻地月氏の可能性が高い。そこで、僕の知り合いの造園会社の社長さんに訊ねたら、まず辻さんの設計で間違いはないだろうということだった。同じ時代に辻氏が手がけた庭は函館近郊にも僅かに残つていて、社長さんも何度か手入れをしたことがあるそうだよ。きつと、庭造りの手法など、職人さんが見ると共通点があることが分かるんだろうね。

この松岡氏だけど、当時はいわゆる長者番付の常連さんで、「函館市史」にも度々その名が登場するんだ。中でも僕が興味を持ったのは日本初の有料道路を作つたという実績。陸三氏は当時はまだ珍しかったバス事業を展開していたそうなんだ。でも、時代的に舗装道路なんてものはなかつたでしょ。雨が降るとぬかるんで、バスの運行には厳しい道路条件だったんだよ。そこで陸三氏が考えたのが雨に強い道を確保すること。湯の川から大森町まで砂利を敷き詰めて雨に強い道を整備。そこを使つてバス事業を行つていたんだってさ。自社のバス以外にも通行料を払えば一般の人も利用できたそうで、まさに現代の有料道路だね。昭和10年に発行された地図を見ると、確かに乗合自動車通路として記載されているのが確認できるよ。

そんな陸三氏の愛でた庭を、啄木亭運営会社の当時の会長さんが、庭を残すことを条件に土地を譲り受けたのが、ここに庭園がある理由。ホテルの部屋数を増やすことなく庭を残し、受け継ぐことを決めた会長さんと、今なお大切に管理しているスタッフの姿勢に胸が熱くなるね。君も次に来る時には、ここに宿を取るといいよ。百年庭園を眺めながらのんびりと時の流れを堪能しよう。ビール片手にね。それじゃあまた。



法人会は会社経営の効率化のためにe-Taxの普及を支援しています。

さらに詳しくはWEBへ

イータックス

検索